

練馬区小中一貫教育資料作成委員会（第8回）「体力の向上」部会 会議録

開催日時	平成21年12月4日(金) 午後3時30分～午後5時30分	
会場	練馬区役所本庁舎19階 1905会議室	
出席者	委員	米津光治、赤木宏行、杉原 昇、宮野いずみ、工藤智昭、高橋健司、畑 陽子（敬称略）
	その他	教育出版
	事務局	五十嵐浩子 統括指導主事、渡辺浩一 指導主事

1 挨拶

部長

今、学校現場では年末に向けて小学校も中学校も子どもたちの、中学校では進路にかかわる面談であるとかもろもろ先生方はお忙しい時期。小学校も同じようなかたちで6年生の進路指導等も行われている。

いよいよ中間報告に向けての原稿の点検ということになってくる。たたき台を作っているのでの参考にしながらご意見をいただいて進めていければと思う。

アドバイザー

委員長の部長先生からお話があったように、学校現場は大変忙しい中で、これまで委員の先生方が時間を差し繰りながら検討を重ねてきたものが、ようやく一つ、文章ということでたたき台になっている。ぜひ効率よく話し合いを進め、いい報告書が出来上がるといい。

事務局

このたび、本当に先生方のご多用の中、資料の作成、ありがとうございました。取り急ぎ、皆さまからお寄せいただいた資料の書式を統一いたしまして、今皆さまの机の上に置かせていた。また、これはまったくの草案ではあるが、体力向上部会の育成カリキュラム、一番最後の A3判のもの。先生方からいただいた資料を一つの表に収めるとこのようなかたちになるのかと。ここからご意見をいただきながら中間報告の最終調整とさせていただければと考えている。

まずそれぞれ作成をいただきました前回の修正点も兼ねて、変更点、また特に重視した点等をそれぞれお話しあう。

2 協議

部長

「基本的な考え方」のところというよりも、前回お持ちした資料と、それから「部会のねらい」というところの文章の文言がかなり重なっているところがあるので調整をしながら文言等、意味合い等が重ならないよう「基本的な考え方」と『体力向上』部会のねらい」ということで分けて書いてみた。今までの流れ、基本的にこれから進めていく三つの重点項目がこうなったという一つの流れというものをそこに書き連ねた。

委員

私がこの部会に出席してから、クラブ・部活動のところについて焦点があった話がありましたので、そのときの記憶と、先生方の会議録を基にした。

小学校の学習指導要領をインターネット上で確認した流れを、勉強させていただいたかたちで載せました。このへんのことについていろいろ表現ですとか、こういう内容を盛り込んだほうがいいというものがあったら、ぜひお話しいただきたい。

中学校はいろいろな取り組み方の今までの流れについては、前々回のときに冊子をお配りしてお話したのですが、前向きな方向で、特例的な措置になるだろうけれども、クラブ活動・部活動、とりわけ小学校は上級学年のほうに中学校とのかかわりを持たせてやっていこうというところの話の部分でまとまったと思われるので、その内容について載せた。

クラブ・部活動の、小学校と中学校のそれぞれのねらいやさまざまな取り組み方についての確認をするには、問題点をちゃんと認識しなければいけないだろうということで、ここに箇条書きで、いろいろ出てきた課題とか問題点を載せた。

事務局

確認ですが、最後の行の4段目にある、高学年（6年生）からのスタートというところと、部活動に関しては体力面のこともあるが、2段目、若干文言を案として修正した。規範意識や協力する態度、こういう心の面も部活動というのは非常に大きな面があるというところ、これは全体で話し合いの中で確認をされた文言をまとめて入れた。

委員

「発育発達段階における体力面の差異」。これは、4年生から中3までで考えたら、やはりだいぶ差がある。メンタルな部分で「精神面の差異」もある。

「入部人数増に伴う活動場所や活動内容の確保」。これは、広く集めれば集めるほど数は増えていきますし、活動場所自体もおのずと制限されてくると思う。限られた施設の中で活動するという。また、上級生になればなるほど、運動系の部活は動きが速いから安全確保。

「競技力向上を目指したときの発育発達段階に応じた専門的指導法」。特に、中体連関係で大会に臨むときの活動を、どうかたちで小学生の指導等を共にするか。

「指導回数（時数）と指導時間帯の相違」。勤務時間をオーバーしている活動のことを言っている。

「指導者側の指導の在り方」。これも、小学生に対する指導の在り方。中学生の上級生に対する指導の在り方。

「異年齢集団同士の指導の在り方」。先輩と後輩の指導の在り方。

「大会、発表会に向けての活動や参加の在り方」。中体連に伴う保護者引率、外部指導者引率による大会。その他、民間試合もの参加の在り方。

「地域指導者との交流や学部指導者との連携」。地域指導者を小学校でいろいろと取り込んで指導されているお話を聞いた。中学校は外部指導者との連携を図っている流れ。

「小中教職員の協力体制と共通理解」。いろいろな学校のお話を聞くと、なかなか難しい。

「小中教職員の異動にともなう措置」。専門性を有した教員が出ていったときのこと。

委員

桜小中でもう始めている。6年生は試験的に月のうちの1週間を中学の部活に通っている。

方法としては、一旦下校してから再登校するというかたちで進めている。ただ、中学との連絡を密にしないと、部活に参加する予定だった子が来ないと中学の先生が大変心配する。

連携というのも、まだ一貫になっていないので、やはりもう少し。同じ職員室になってしまえば、連携は取れるのだろうと思う。

今一番大きく感じているのは、やはり年間を通した計画が必要。中学の、例えば試合とか、それからそういうものがある時期の近くというのは、やはり小学生が入ってしまうとお荷物的になってしまうのでは。

年間を通して、新人戦とか、部活の中の試合がいくつかあるのか。そういうものがある時期は、やはり小学生が部活に参加するというのは無理かなど。どうしても部活は、勝つとか、競うとかいう部分で対外的なものもあるので、そこを考慮して支障のない範囲で小学生は参加すべきなのだろうと思う。

ゆくゆくはちょっと怪我をしたりとかもあるのではないかと。いずれにしても、6年生でも中学3年とか2年にはお荷物になってくるのだろうと思う。

委員

小6ぐらいだと体力的にそんなに中1と差異はないと、前々回お話をうかがった。ただ、小6は中1の下であるという4年間の育成の流れにならないようにというお話があった。例えば、かわり方を持たせるには歴然と大会に出場できる・できないというのがどうしても小中の境界線にはある。6年生でやってくると、中1でも試合に出る機会が結構あったりするのです。だから、欲求はどうしても出てくると思う。指導者が一貫校で始まったときに、部活動は明らかに小中の先生方の複数体制がいいでは。

委員

今の桜小中の場合には、小学校の教諭が部活の指導にいくところまではいっていない。ただ、小学校で待機したり、それから行って周りで見えたりはしている。やはり小学校の教諭に、中学生を指導するという自信がない。よほど学生時代に専門的にやっていた小学校の教員だったらある程度指導できるのだが、一つ課題でもあるかなど。

事務局

今、実際にもう6年生から。週何回ぐらい入っている。

委員

週というか、月のうちで部活ウィークというのがある。

委員

中学だと試験とかいろいろあつたりして週に何回というのが設定しづらいので、例えば11月は第1週目。あるいは12月だと第何週目みたいなかたちで、1週間単位でやっている。

事務局

その週だけ参加している。そして小学校の先生は指導にはあたっている。

委員

今のところあたっていない。今のところそういう状態。

委員

前々回、この綴りをお配りした流れの中に、私がこれを作っている関係で、部活動の年間でどんな大会があるのかということも 28 ページに載せている。結構毎月試合がある。公式戦と呼ばれている中体連が主催する大会というのは、夏期の大会、それから9月以降は新人大会と呼ばれ、1月、3月までは、昔は民間の試合も少なかったのですが、最近はやたら地域総合スポーツ型にあれした部分もある。オリンピックや国体強化とかいろいろなこともあって、各競技団体毎目白押しで年間の中で大会がいっぱいある。

委員

一つ良いのは、6年生は「試合に出たい」あこがれる。6年の子に聞いてみると、「先生、僕も中学に行ったら試合に出られるように頑張る」というかたちの話をしている子がいる。動機と言うか意欲付けと言うのか。そういうものにすごく効果があると思う。

事務局

クラブ・部活動は重視する指導項目の「楽しさを味わう」「意欲的に運動に親しむ」という登録にあえて入れある。

アドバイザー

前回も少し話をしたが、クラブと部活動のあり方というのは、本来ここで話をすることがいいのかどうかというのをずっと思っている。それはそもそも今回の資料でも示されているように、かたや特別活動の中で明確に教育課程の中にいちづけられているものと、教育課程外で任意で参加するもの。それをやったほうがいいよとこの部会から提案することの理由は、まさに体力の向上において特に運動部活動は効果があるよと。

今日お配りいただいた資料の1枚目になりるが、とりわけ心の部分で言うと、「挑戦する意思や意欲」や「困難に負けない心」、こういうものを育てることに非常に教育的な意義があるのだということを我々はここで確認をして、可能であれば小学校の高学年から部活動の参加というようなことも考えられるのではないかという位置づけ。だから確かにやろうとすればこういう課題があるのだけれども、現実に小中で桜さんで始めた中で、例えばこういう中のこういう部分はこんなふうな配慮をしたとか、こんな手立てをしてここの部分を小中の初めての取り組みの中で、ここの部分は大事にしながら実践を一步進めてみましたというようなものがあれば、いろいろな学校の参考にはなる。

「こうあるべきだ」とか、「こうしなければいけない」というような提案の仕方は、ここはすごく難しいのではないかと。

委員

やはり体力の差。それから、小学校と中学校の時間の差がある。今だと部活動に参加して帰るときには真っ暗。6年生は小さい子たちだから、安全面も配慮しなければいけない。

あとは課程外のことだから、親の承諾を取らないとできない。小学校の場合にはより一層親というものを重視しなければいけない。

親御さんからクラブ活動の延長線上と考えられるとまずいので、部活動というのはまったく違うものだということをしっかり認識してもらう必要がある。そういう意味で桜中の先生方は一生懸命プリントを作ってくださいまして、誓約書というか、そういうものも取っている。

例えば、小学校で言うバスケットクラブと、中学で言う部活のバスケットというのはまったく異質なものだというふうに、保護者自身がとらえていないと、例えばすぐに「こんなことさせて」みたいな話になってしまう。そこでは存在意識はかえってマイナスになってしまうだろうと思う。そのへんの親への意識付けも大事。

事務局

今回スタートするにあたって保護者の説明会等は開いたか。

委員

説明会はしなかった。「文章で部活というのはこういうものです。やるにあたっては保護者の方の承諾を得ないとできませんよ」というのは一筆取ってある。

それから下校時刻。再登校になって、今度は部活後の下校の時刻はこういうふうになりますというのはきっちり押さえておく必要がある。

委員

一つお聞きしたいのは、桜中自体はシステム上、生徒全員、部活全入にしているか。

委員

全入にはしていない。

委員

中学で全入でないとしている流れと、小学校のほうのことを考えると、本当に意欲があってもどうしてもやりたいという子どもたちを募るかたちにするのか。

委員

あともう一つ問題がありまして、桜中に来ているのは桜小だけではないのです。緑小もある。それで、緑小はどうしてくれるんだと緑小の保護者からも、「桜小だけやるわけ」という話になってはいる。それで急ぎよ、緑小でも募集をかけようかという話になった。ただ、緑小は桜小よりも学区が離れていて遠いので、下校のことが心配。だからかなり難しい。

部長

その緑小の保護者の方々というのは、桜小がやっているの自分たちの子どもにもやらせた

いという意向のほうが強いのか。

委員

やらせたいという人も中にはいらっしゃる。桜小と緑小が、塾とか習い事で一緒になる。そこで情報が共有され「何で桜小だけなの。緑小だっけに行っているじゃない」という話になったときに、まずいだらうという話になっている。

緑小の副校長先生も、今度、一貫の会議に参加していただくようになりましたので、それで今度は話がスムーズに通じるかと。

事務局

安全面というところで保護者との連携を配慮したということが今ありました。

また、例えば今回、体力面のところでの具体的な配慮は。

委員

あとは体力面とか技能面とか……。

まだ始まったばかりなので、配慮していくところは部活の種類によっても違うと思う。基礎的なことからしっかりやっていかなければいけないだろうと思う。中学3年が投げたり打ったりする球を、小学校6年生にまともに当たったりなんかしたら、やはり危ない。そのへんを配慮する必要はある。

事務局

終了持間は中学生も小学生も同じか。

委員

小学生の場合には1時間というふうにした。17時から始めて18時まで。ただ、今は18時でも真っ暗になってしまう。中学は18時半から19時ぐらいまでやっているのではないか。

事務局

学校によってそれは違う。秋時刻になると、一気に17時半とか17時という学校もある。

アドバイザー

あまり個別具体のところ突っ込んでしまうと、事情が違うから試行的に初めて取り組んだとき、共通的にどこの学校も参考になるであろう、例えば事前に保護者に対して部活動の意義を周知するためのプリントを配布、活動のための誓約書、活動の時期を明示して小学生については活動を1時間にしたとかいうようなことは参考になる。

事務局

A3判の、カリキュラムの部活動で、小学校第6学年に部活動説明会ということを入れてみたが。

委員

うちの場合はまだ来年度はどうするかということはまだ話し合っていない。今とりあえず始めたばかり。やはり部活動説明会、小学校6年生の保護者会に中学の先生が来ていただいて、「部活動というのはこういうものです」と。きちんと踏まえて参加をしてくださいという話をする必要がある。ぜひ必要かなと。

部長

アドバイザー先生からもご指摘いただいたところで、この教育課程の内と外というところで大きく取扱いが違って来るだろうし、それから指導者側の姿勢だとか、それから保護者の理解度だとか、今ご指摘していただいた通りのことで、本当に大きな色合い的な違いということがここに存在する。それを同じように合体していくというのはなかなか難しい部分。

今、保護者会の話が出ていたのが、これも学校体制の中で多少違いはあると思うが、本校の場合には、保護者会は4月当初に部活動の専門の保護者会というのを全体でやり、それから各部活動ごとにやはり運営方針というのは違って来る。活動の頻度も違うし、強さも違うし。目指すところも違う。子どもたちが楽しく活動できればいいという部活動もあれば、やはり区の大会、都大会、それから関東全国等を目指していくのだという部活もある。同じ学校でも部活動そのものの目指すところが違うものがある。全体の部活動の保護者会をやったあと、部活動ごとに顧問が主催して説明会を保護者あてにやっていくということは、たぶんこの学校もやっている。

中学校では必須でやらなければいけないと私は思っているので、当然6年生が部活動にかかわってくるといふ小中一貫の中では、プリントだけではなくて、年度はじめに説明会をして小学校6年生の保護者にも徹底して話していくということは絶対に必要。

特に、今あった下校面、安全面、部活をやっている最中の事故、怪我。小学校の保護者の方々にも十分理解していただき、お互いに協力体制、共通理解の下に参加させることは必要。

事務局

この7番の「クラブ活動・部活動」なのですが、内容を語るときには、クラブ活動のところと部活動のところと項目を分けておいたほうがいいのか。取り扱いも教育課程上のものと教育課程外というふうな取扱いの違いもある。項目としてはクラブ活動・部活動ということですので記入をしているが分け方としてはいいのか。

項目をそれぞれ分けて、部活動に関してはアドバイザー先生からもありましたが、よさ、メリット。部活動を実施する第6学年から入ることで、教育的価値がある提案に収めてはどうかと。

アドバイザー

クラブと部活をあえて分けて表記する必要はない。今までも小学校はクラブ活動があり、中学校は部活動をやってきた経緯がある中で、今回は小中一貫教育の中でこのクラブ・部活動のあり方として、体力の向上の面から、技能の向上とか心の発達の中で非常に意義があるということを取り組むのだとすれば、こういう取り組み方があるのとまとめて書いたほうがいい。

委員

来年まで続くのですよね。

事務局

体力向上を9年間でどういうふうやっていくかという考え方、視点としてのクラブ活動・部活動のあり方といいますか、そのような提案や考え方を示すというようなことになる。

あり方については、中間報告書自体は枚数が限られているので、すべて書くことはできない。ただ今年度、桜小中でやっていただいている例えば保護者向けのプリントだとか、小学生に向けた中学校が作った部活の紹介だとか、そういうものは指導資料として次年度に生かしていくものとしてはストックしておいて、よりよい方向を探っていくということが考えられる。

アドバイザー

この部会でそもそも小中の部活動を合同でやる方がいいとか、絶対にやらなければだめという提案はできない。ただ、体力の向上という観点からすれば、小学生が部活動に参加する意義はあるのではないかとということがここでは確認をされ、一つの方策として桜小中で1歩踏み出してみた。そのときにこんなことを配慮してやった例がある。

事務局

「③健康を保持増進するための知識理解」というところ。前回はここに食育ということが大きく打ち出されていたのが、ご指摘いただいたように、少しトーンを下げ、健康を保持増進する。望ましい生活習慣というところで、現在各学校教育の教科においてはこういった取り組みがなされているか、少しトーンを抑えて表記をした。

続いて(4)の「目指す子どもの姿」を。

委員

第Ⅰ期のところでは、2行目「この時期にさまざまな基本的な動きを培っておくことが重要である」という文言を入れた。それから、第Ⅰ期の最後のところ、健康面が入っていなかったなので、「運動を通して健康であることのよさを実感できるようにする」という項目を入れた。

第Ⅱ期は、あちらのほうでは「多くの種目」というふうに最初はなっていたので、「種目」と入れたが、「領域」ということで直した。

上から3行目の、「知的に理解」、これは「理性的な理解」だったのが「知的に理解」というかたちに変えた。健康面が入ってなかったなので、後半の5行目、「自分の体に関心をもって生活したりできるようにする」という文言を入れた。

ここでは移行期として、小学校6年から中学校へのつながりということを入れたほうがいいのかというお話があったので、最後の4行のところを入れた。

第Ⅲ期のほうに入っていた性差の部分を第Ⅱ期のほうに上げ、性差の部分は抜いた。

2行目のところで、「体験したものを生涯続けていく」というような文言を入れた。

事務局

それでは続きまして、「体づくり運動」

委員

中学校の視点を入れました。「②練馬区の体力の現状」のところで、小学校プラス中学校でやや下回っている項目、ハンドボール投げ、立ち幅跳びというようなところを入れた。

③の白丸の3番目、「体力を高める運動」のところに（小学校高学年・中学校）と入れた。

4行目から、「また中学校では力強い動き及び動きを持続させる力を高めることに重点を置き、運動負荷の条件を変えながら体力を高めていく」というような、中学校での指導の重点項目についても入れた。

事務局

では、続きまして「学校行事」。

委員

一部訂正がある。5行目の「柔軟に組み合わせていくが必要になる。」の次の、「計画的・系統的に位置づけられる学校行事」というのは、これは柱立てのところになるので改行していただきたい。

その内容として「①体育集会」、「②各種記録会的なもの」というふうになっていく。あとは同じ柱立てとして、「今までの学校行事にとらわれない全校規模の行事」というかたちで二つの柱立てになっていく。

9年間を見通して学校行事を考える上では、各学年の発達において計画的・系統的に位置づける学校行事と、もう一つは従来の学校行事の枠にとらわれない、発想を新しくした全校規模での行事を考えなくてはいけないということで、体育的なものに限って言わせていただくと、体育集会。あるいは各種記録会的なもの。例えばスポーツテストですとかマラソン大会とか陸上とか水泳とか。

もう一つは、今までの学校行事のとらわれない全校規模の行事ということで、例えば運動会のことを「体育祭」としてみましたが、「運動会」というものにとらわれないもの。あるいは、遠足も従来の体験を豊かにしようという目当てでいくならばこんなことが考えられる。

事務局

それでは「望ましい生活習慣」。

委員

主に食育の話がメインになっていたかと思うが、1ページを作るに当たって、食育、それから家庭科や保健領域などとの関連も挙げてということ。1ページにすべて書き表すことは大変難しかった。その後桜小学校、桜中学校の食育の全体計画を事務局先生からいただきまして、このようなことも中心にページを作ったらどうかというアドバイスを受け作ってみた。

食育などに関してはいろいろな定義付けがされているのだけれども、この部会として「こういう理由だから大事なのだ」ということを何かバンと打ち出してから進めたらどうかというご意見をいただいた。

調べていく中で食育基本法がそのようなことを書いているということ。その後、その下に書いてあるのは20年度の調査報告書の中に食育のことに関して書かれていたものがあったので、

それを参考にしながら言葉を作ってみた。四角で囲ってあるのは強調ではなく、この部分がこのような言葉や書き出し方でよいのか迷ったので、四角で囲って送らせていただいた。

その後、家庭科と保健領域のところについては、学習指導要領から抜粋のようなかたちでということもあったので、取り出した。しかしこれは小学校の分だけなので、中学校の学習指導要領も出さないといけないかなと思うが、文言として載せることがこのページの役割としていいかどうか、ただ載せているだけだと分かりづらいのではないかなと自分では思った。

③については、桜小学校・桜中学校の食育の全体計画の目標になっている。A3の資料のところから抜き出して書かれているのが、家庭科・保健、中学校の技術家庭分野等々の具合的な単元名。その学習をするか学年をカッコ付きで取り出した。

事務局

最後の育成カリキュラムと照らし合わせながら、それぞれの項目を追っていただきたいと思う。書き方、内容の方向であるとかいろいろとご意見をいただければと思う。

難波先生、この二つなのですが、育成カリキュラムのほうは二つ。こちらは指導要領の学校行事の内容で①と②と分けてみた。遠足だけが内容やジャンルから外れてくる。ただここでオリエンテーリングとかハイキングを例えば意図的に入れることで、これが体力の向上にも関係してくるのではないかということだったが。

委員

計画的に9年間を見通して、どういうテーマを持って行事を組んでいくかという部分で、体力的なことを挙げればこんなことが考えられるのではないということまでしか踏み込めない。候補地や活動の選定ということで、こういう場合もあるだろうということ。

事務局

この二つの項目立ての文言なのですが、「計画的・系統的に位置づけられる学校行事」と、「今までの学校行事にとらわれない全校規模の行事」。ここ読んだときにイメージがわきやすい何か文言があるかなと考えたが。これは従来からあるものと…。

委員

もう一つは発達段階を考えなくてはいけない。要するに、1年制と9年生を一緒にしては考えられないので、そのへんのところと、それからそれを一緒にやるためには従来の学校行事の発想をまったく新しくしないと一つのものはできませんよということを言っている。

委員

表現が難しい。「とらわれない」という表現はよくないかもしれない。

委員

いつまでも今までの運動会の発想でとらわれて考えていると、例えば短距離走は1年生から9年生まで全部やるという発想でとらわれてしまう。これはもうできませんよということになってくるだろうと思う。短距離走なら短距離走。記録会ならいいのだが。小学校1年生で記録

会というのは変な話。だからもっと、1年生と9年生が一緒にできるような運動会というものは、「運動会」というより「体育祭」になってしまうのではないかと思う。

事務局

これは、実際にもう行われている行事というのは、この中にあるのか。

委員

今のところ、小中で連携してというのは今のところない。今、運動会も計画中で、12月の今月末までにある一定の枠で考えようという話はしている。ただ、来年度は一緒の実施は不可能。

部長

学校行事は、私も今ずっと話を聞かせていただいて、学校行事のところが取り組みとしては一番難しい部分なのかなと思ったの。一つの理由は、移行期だから全体の指導時数、中学校の場合は現行が980、24年から1015になっていく。小学校の全体の枠組みが違うというのは十分承知している中で、中学校の中では学校行事をとにかく精選していかないと授業数は確保できないという現実問題がある。

例えば、カリキュラムの中の学校行事の中で本校がやっているものは三つ。ここに書いてある体育祭・運動会と、それからマラソン大会と遠足。この三つをやっているけれども、24年度の完全実施に向けて、授業時数を確保するために、マラソン大会とか遠足を検討事項として削減するかどうかというところで煮詰めている。もしかすると体育祭だけは残して、この両方が削られてしまう可能性もある。一つだけ削ってそれでおしまいということもあるかもしれない。

例えば学校行事というのは、小中一貫校の中でどれだけ年間を通じて、体育的な行事だけではなくてほかの行事もたくさんあるから、どれだけ学校行事をこれから先のカリキュラムの中に組み込んでいくことができるのか。現実問題としては非常に難しい。

委員

小学校と中学校と分けてやるようなかたちのものもあっていい。全部、1年生から9年生まで一緒にやるという行事は、難しいだろうし、それなりにやはり発達段階もある。

部長

おそらく今、先生がおっしゃっている学年毎の、体力に関する行事というのは、比較的小学校ではとらえやすいのではないかと思うの。中学校は、やはり1年生の特別な行事、2年生の行事、3年生の行事という枠組みで、体力をある程度テーマにした行事というのはおそらくほとんど組めていない。

例えば縄跳びだとか。この縄跳びで全部やりましょうとか。それから、朝、子どもたちをグルグル回したりということをやっている小学校も結構ある。ああいう発想というのは、中学校ではおそらく全然ない。

小学校の体力的な行事の取り組みと中学校での体力的な取り組みというのはかなり大きく違う部分というのがあろうなという点。そのあたりが、今先生がご指摘になるように、各学年の発達段階に応じた取り組みという方向に進まざるを得ないのかなと。

むしろ全体的な学校行事の削減ということを考えて、授業数を確保するということが大前提で今考えられています。そしてインフルエンザ等もかなり話題になっています。ではその削った授業時数をどうやって確保するのだという、それはこれから先も学校行事を少し削減していく。途中で変更していかざるを得ない現実もあるわけです。ですから、あまりここの学校行事のところを、枠を広げすぎても、ちょっと現実離れた内容になってしまうかなど。

むしろ、例えば全体で取り組めることを少し、ではこういうこともできるのではないですかという提案として、例えば体育祭を挙げてみて、一貫校としてはではこういう体育祭の運動会のつくり方がありますよという、一つ焦点化して提案するということも、この部会としての立場であるかなど。一つの行事を焦点化していくということもいいのかなど。

事務局

体育祭のほかに、小中で連携して取り組めそうな行事、今いくつか挙がっていますが、何かあるか。体育祭が一つ挙げやすい行事かなと思うのだが。

部長

あるとすれば小学校の1年生から中学校の3年生まで全体的にできることという、例えばマラソン大会。

委員

あとは小学校の高学年と、例えば中学……、でもあれかな。例えばスポーツテストの共同開催とか。体力テスト。

委員

やるのが違うでしょう。

委員

あとはマラソンとか、陸上、水泳になると違う。

委員

マラソンだって中学校のマラソン大会と小学校のマラソン大会では、たぶん全然違う。

委員

小学校は、要するに動きを持続させる運動。中学校というのは完全に違う。陸上のペース走になってしまう。

部長

長距離走の領域。

委員

完全にねらいが違う。

部長

ただ、やはり子どもたちには中学校の1年から3年生であっても体力差というのはありますから、個々の目標というのは全部違いますよ。完走するのを目標にするという子どももいるし、タイムを目標にするという子どももいる。その視点というのは、それぞれの学年でしっかりとらえていけば、小学校の子どもたちが入ったとしても、それは十分通用すると思う。

事務局

内田先生、マラソン大会は学校行事の位置づけのなかでは、体力向上には結構価値があるのではないかというお考えだったかと思うが。

委員

マラソン大会そのものよりも、マラソン大会に向かうまでの準備期間。例えば先ほど出てきました、朝、走ったりとか、そういうのもいいかなと思うのです。実際、当日は走って終わり。ある意味では先生がおっしゃるように完走とか上位に入るぞとか、いろいろそれぞれ違う。それはそれでやはり、準備期間で小中関係は一緒にやれるところもあるのかなと。

委員

例えば小学校の1、2年生で持久走というのは無理。要するに、1、2年生は、ただ走って行って、ペースも何も分からない。

委員

基本的に、体育の中でも競技ではないので、練習ということがない。

委員

だから、走って行って苦しくなったら止まる。小学校1、2年生というのはそのへんで動きまわりますので、例えば長い距離を自分のペースの合わせてというのが理解できるのは、やはり5、6年……、4年ぐらいからできるかな。

委員

いや、5年。

委員

5年だね。4年でもまだ難しいかもしれない。

委員

4年は陸上はやっていない。

委員

5年なら自分のペースに合わせてとかそういうことはある程度理解できるとは思う。

事務局

ある程度発達段階のところで、例えば5、6年と中学生で走る距離もちょっと変えて、ただ、マラソン大会というような行事は組むにしても、内容は何キロコース、何キロコースみたいなところで変えてやることはいいかもしれない。

一つは、全身持久力というのは本区の課題。あくまで提案だが、そういった取り組みもいいのではないか。

もう一つは、この新体力テスト。1年生から新体力テストを本区としてはやっていないところが多い。3年生からの新体力テストというのが全校実施。1年生からやらせている実態として、何かいいところ、あとは難しいなと感じるようなところを討議。

部長

できる種目からやっていくということ。それから、体力テストのやり方そのものを、やはり学年を積んでやり方を学ぶということもあるし、自分の記録を知って、それをまた体育の授業に生かしていくということができる。

でもやはり、1年生のはじめのうちはやり方を教えるということ。だから、記録を取るというよりも、それは参考記録だと思う。そこからだんだん自分なりに記録を知っていくという位置づけにはなると思う。

委員

うちでも1年からやっていますが、まず体育部の人から1年生の先生に教える。

やり方をこうやるといいよと。基本的な計測ではない。うまく回れるように。正しく子どもに指導するポイントを先生に教えて、さらにやるときには体育の人が入る。4クラスあつたら5人入って、それでやって2回ぐらい。だから、1年生は最初、すごく時間がかかる。それでも正確ではないデータを送っている感じで大変。

ただ、それで、投げ方が全然できない子が、スポーツテストで2回ぐらい指導すると倍ぐらい距離が伸びる。だから、その指導にも役立つよとは言ってやってもらっている。本当に、1、2年の子どもたちはそれすら知らないで通ってきってしまう。だからそういうのから言えばいい意味はあるが手間がかかる。

事務局

あえてこの小中一貫で体力向上という視点から、体力テストは今は小学校3年生からの取り組みだと思いが。

委員

1年生からの体力テストというのはどうなのかなと。種目を易しくするとかしないと、運動の正確性とかそういうものは、1年だと難しいのではないかなという気がする。

データを取るのならば正確に取ったほうがいい。1年生となると、やり方自体を理解することが……。しかも5月から6月。入学式が終わって1カ月ぐらいですぐにスポーツテストが始まってしまう。その時期というのは、まだ背の順に並ぶことさえも大変な時期なのに体力テストが入ってくることによって、どうなのかなと。秋口なら若干はできるのかなという気がする。

事務局

3年生以上が妥当ではないか。

委員

1年から6年まで体力テストをやっていたときがあるのが、私も自分の考えとしてはやはり、低学年は正確なデータが取れない。効果的ではないなと思って、そこを3年から変えた。

ただ、低学年がいるときには6年生と組ませて6年生が教えて回っていくというかたちを取った。ただ、それは6年生は何の時間数で取るのと言われればちょっと厳しいものがある。

マラソン大会は、皇居のところでやっていたのですが、それは1年から6年まであった。

1・2年、3・4年、5・6年でやはりコースが違うが、それでやることはありました。

その区では小中陸上競技大会というのがあった。参加は6年なのですが、6年と中学生が一緒にやることで、一緒に競技をするわけではないのですが、同じ場所で見るということはすごく子どもたちには意欲を与えた。

委員

これは、朝会とか集会というのは小中が一緒になるのか。

委員

それも今、桜中と桜小は全然統一がされていない。この前もふと、月曜日も桜中は全校朝会をやっていないねという話になって、中学というのはあまり全校朝会はやらないのか。

部長

そんなことはない。うちは毎週やっている。

委員

校庭がつながっているので、「もしかすると桜中は体育館でやっているのか」なみたいな話に。

部長

中学校の場合には体育館でやっているところが多い。

委員

だから、桜小学校に長くいる先生も、「ねえ、何で桜中は全校朝会をやらないの」と言ったら「そう言われればそうね」という感じだったが、体育館でやられているのかもしれないね。

だから、もし一貫校になれば、たぶん当然校庭か何かでやるようになると思う。

委員

集会的なものは一緒というよりは分離。曜日で分けたりとか。

委員

たぶん分離で。やはり1年生から9年生まで一同に会してというのは、無理だろうなど。

委員

行事はねらいと発達段階に応じて共同開催できるものと、分離してやるものについて。やはり、ねらいが違いすぎてしまう。

委員

柱立てで、系統的・計画的という学年の発達段階に応じて。それから全校規模で。

委員

分け方として遠足・集団とか、体育健康、学校行事など。

こういう分け方はないので、表記としてはどうしたらいいか。指導要領は健康安全・体育的行事と、遠足・宿泊とか、行事の分け方はこういうわけ方。意味合いが分かる。

事務局

小1から中3まで取り組める行事と、一部、例えば5、6年以上と中学生という。

委員

それが一つのこの部会の提案になる。

委員

そうすると、体育的行事の中の、ちょっと分ける段階で、その中の全校実施と…。

委員

健康安全と、例えば遠足というふうに分けるのではなく、全体でできるものというふうにするほうが。

部長

これから先、小中一貫校が増えてきてこの資料を見たとき、学年別にやるのだったらこういうことができるかなとか、これをやるならある程度小学校の高学年と中学校が一体になってとか、これだったら全体できるとかという一つの資料になればいいとは思う。

マラソン大会の実施のガイドラインというものを策定させてもらった。例えば区としてマラソン大会という文言をこの中に入れてある程度紹介していくということであるならば、マラソン大会を安全に実施するためのマニュアルを資料ということで別個に付けたほうが良いような気がする。区として作成してマラソン大会という文言を中に盛り込むのだったら、例えば体育祭であれ部活動であれ全部、事故とか怪我だとかは付きもの。特に長距離を走らせるという子どもたちの体力的な負荷というものを考えると、そういう資料も頭の中に入れておいたほうが良い。

アドバイザー

現実に今ある学校行事の中で住み分けをしていくというのは、僕はすごく難しいと思う。ただ、1年生から9年生までがそろった学校の中で、新しい視点で学校行事を考えるということはものすごく大事で、体力差とか技能差のないまさに遊び。運動遊びとか伝承遊びみたいなものとか、ニュースポーツを取り込むとか、そういう可能性はすごくあるというのが一つ。

それから、例えば現実に外部の人に来てもらう交流給食なんかを小学校さんはよくやる。それから中学校も、保育体験で学外に出ていく。だから例えば1年生と9年生の組み合わせとか、小中の交流給食とか、せっかく小中でやるわけだから、入れてもいいかなど。具体的な個別の中身はまり詳しく踏み込むことはないのだけれども、小中でやるのであればそういう教育的な意義を踏まえた、まさに新しい学校行事の創造ということで、何か入ってきたほうがいい。

今までだったら小1から6。その縦割りが今度は1から9という可能性に広がる。

事務局

この育成カリキュラムの学校行事の①に体育集会とかがあがるが、ここは小1から中3まで会して何かできるものかなというイメージがあったのだが。

アドバイザー

小学校は縄跳び週間とか月間とか一生懸命に取り組むけれど、中学校になるとパタッとなくなる。なぜ中学生が参加したらいけないのだというのが僕はよく分からないので、そういうときに中学生が参加するのは逆に面白いと思う。

事務局

例えば個々にニュースポーツがあつたりとか、伝承遊びがあつたりとか、いろいろな体育集会という名があっても、いろいろな取り組みというのを創造していくということも、一つ視点ではないかと。

この学校行事のところは、体育祭や、一つマラソン大会は配慮が必要な点もあるが、そのほか体育集会の視点を少し広げた取り組みというところも。

アドバイザー

特別活動の中の集団活動だから、学校行事というのは要するに集団で活動するというところに意義があるわけで、そうすると異年齢でかかわること。お手伝いしたりされたりみたいなことも、先ほどスポーツテストの話がありましたが、それが今度は中学生が低学年にかかわっていくというような可能性はできるわけですから、そういう意味で少しプラス思考な行事を見直すということがあってもいい。

事務局

本間先生、「健康の保持増進」のところなのですが、先生からいただいた資料からあえて抜き取って、その部分は育成カリキュラムのほうに移行させた。中学生では新学習指導要領に体育理論があり、運動の機能を科学的に勉強する機会というのがあがるが、そこで「健康の保持増進」というところに、知識や理解、体育理論的なところもあってもいいかと思う。

あとは、「運動に必要な動きや技能」の重視する指導項目で、工藤先生、今こちらの育成カリキュラムのほうは運動例ということで文言と、それによって高まる巧緻性ですとか敏捷性とかを入れた。

あとはその運動の行い方という説明が入っている。ここは運動例と高まる体力項目と、運動の仕方というところだけで、欄的にもここはめいっぱいということもあるのだが。

委員

「体づくり運動」とどこかに入れておかないと、この前もあったが、ほかの運動領域をやらなくてもいいというわけではないので、この欄にはそれも入れるという話。

だから、体づくり運動でくくって、その脇に、例えば「第Ⅰ期ではこんな運動領域も当然体育の学習の中でやらなければいけない」「第Ⅱ期でこんな運動領域も」ということなので、もうちょっとこれを全体的に狭めて、これを全部くくって体づくり運動でメインにする。そしてその第Ⅰ期の空いているところにほかの運動領域として、例えば、跳んだりはねたり跳ねたりするだとか、高学年で言えばポールだとか陸上だとか、中学校でもいろいろありますよね。そういうものも入れていかないといけないのかなと思ったので、こちらは別に考えていなかったのです。脇に入れるということがあったので。杉原先生がおっしゃったのだと思いますが。

事務局

出ていました。

事務局

項目として体づくり運動というものがあって、そしてこの三つがある。そしてその脇にそれ以外の高める運動領域。

委員

学習しなければいけない運動領域があるので、体育でメインはここにおきましたとよという視覚に訴えるところと、ほかにやらなければいけない運動領域ということでやっていけば、あと細かい点は、先ほども言いましたが、来年度にワークシートを作ることであれば、そこで運動の具体的な資料を用意するというかたちでいいかと。

事務局

このクラブ活動・部活動で育成カリキュラムのところなのですが、ここは率直に申し上げて、指導要領から抜き出した文言。ここには何が書けるかなと思ひまして、そこで真ん中に説明会をやったらどうかというので入れて、あとはクラブ活動・部活動の意義・目的を記している。やはりクラブ活動というのは小学校の興味・関心を追求する、楽しいな、おもしろいなというのをやり、味わいというところ。そして今度は部活動になってくると、そこに例えば責任感ですとか協力、友情とか、さらに追求する上で求めていくものがまたどんどん変わってくる。

先ほど五十嵐統括のほうからあったが、今回の中間報告は、あくまでも2年目に向けての方向性を示すということ。こういった方向で検討を進めていくというところで、ある程度具体性に、例えば具体性があまりなくても方向性がある程度示せれば中間報告の内容が満たされる。

そういう意味では、クラブ・部活動に関してはどういった学年でどういった時期に行うか。そして先ほどの配慮事項に関しては別のところで扱いながらその説明を加えていく。

事務局

この部分をちょっと事務局で預からせていただきたい。小学校の先生にとってクラブ活動の意義というのは十分承知されていて、中学校の教員にとって部活動の意義というのはあるのですが、その二つが違うのだという意識が、実はお互いがないという部分があると思う。

ここにいらっしゃる方は十分お持ちなのですが、かかわる中学校の教員、かかわる小学校の先生方にとっては、もしかしてススッと流れるものではない。流れそうだけれども流れない。そこに壁がありギャップがあるというようなことがあると思う。

それから、桜小中で今実践していただいている部分というのを参考にするのだけれども、一方で体力に関係ない部活動、体力に関係ないクラブがあるということ。そのところがあるので、あくまでも体力の向上というところに焦点を当てないといけない。

事務局

全般を通していろいろと参考になりますご意見等をいただいた。今年中にある程度報告書をまとめる必要がある。ご了承が得られれば、文言修正や、今いただいた意見を含めアドバイザー先生、部長校長先生、杉原校長先生等と確認し、ご了承を得ながらまとめさせていただければと思う。分からない点やお聞きしたい点に関しては、電話やメール等でおうかがいすることもある。一度、中間報告書としてまとめる過程である程度精査させていただくというところで、ご了承いただきたい。

委員

僕なんかだと行事に関する原稿をある程度直すというのは、いつごろまでに送ればいいのか。

事務局

私のところに原稿を頂戴するリミットを、12月21日の月曜日ということにしているそうですね。

委員

では、では18日で。

※次回日程：1月26日。東庁舎の5階501号室、15時半～